

福岡県で見出された Manson 幼条虫症の2例

宮原, 道明
九州大学医療技術短期大学部

石井, 寛
石井皮膚科クリニック

<https://doi.org/10.15017/262>

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 25, pp.29-32, 1998-03. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan

バージョン :

権利関係 :



福岡県で見出されたマンソン幼条虫症の2例

宮原道明 (九州大学医療技術短期大学部)
石井寛 (石井皮膚科クリニック)

Two Cases of Plerocercoidosis Found in Fukuoka Prefecture

Michiaki Miyahara and Yutaka Ishii

Two cases of plerocercoidosis caused by *Spirometra erinaceieuropaei* were reported. The first case was 31-year-old woman in Munakata District, Fukuoka, and larva was found in the right femur. The second case was 60-year-old man in Maebaru city, Fukuoka, and larva was extracted from the left femur.

はじめに

マンソン裂頭条虫 (*Spirometra erinaceieuropaei*) はイヌやネコを終宿主としており、ヒトは非固有宿主で通常ヒトの体内では成虫にはならない。本虫のプレロセルコイドは人体に寄生して種々の臨床症状を示すことから、従来マンソン弧虫症と呼んでいた。しかし、その生活史が解明された現在、マンソン幼条虫症と呼ぶように提唱されている¹⁾。本症のわが国での例数は1994年現在で469例あり、男女比は3対2で、女性が相対的に増加し

ていると報告されている²⁾。

著者らは以前福岡県から2例のマンソン幼条虫症を報告しているが^{3,4)}、このたび新たな2症例に遭遇したのでその概要を報告する。

症 例

症例 1

患者: F. T., 31歳, 女性

住所: 福岡県宗像郡津屋崎町

現病歴: 1991年3月21日, 右大腿部に腫脹が生



図1 虫体全形図(症例1, 目盛は1mm)

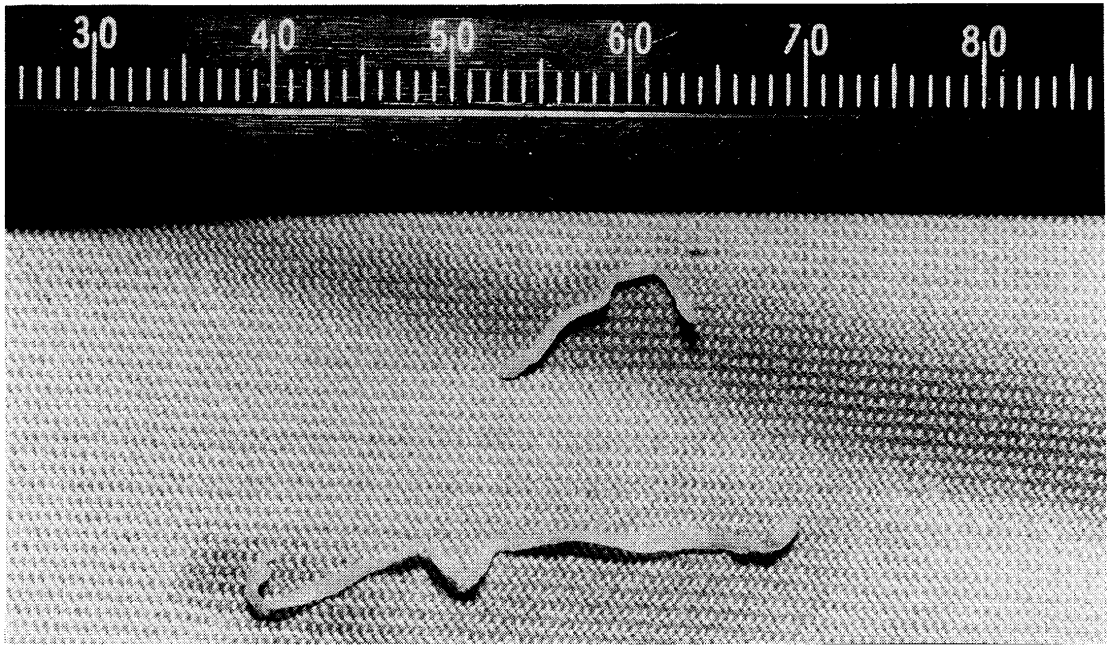


図2 虫体全形図(症例2)

じたため宗像郡福間町の山田胃腸科を受診した。同部には炎症があり、痛みと発赤も認められた。同月28日、福岡市東区馬出の八木病院で切開され、摘出された虫体は白色紐状で、長さは52mmであった。10%ホルマリン液で固定し、保存された(図1)。なお、感染源と思われるものの摂取については不明である。

血清学的検査：Ouchterony法および免疫電気泳動法(IEP)による寄生蠕虫血清検査を杏林大学医学部熱帯病学・寄生虫学教室に依頼した。IEPにおいて、マンソン弧虫抗原との間で沈降線が認められた。

症例 2

患者：T. I., 60歳，男性，建設業

住所：福岡県前原市新田

現病歴：1996年12月頃から左大腿部に腫瘤ができた。翌年1月になって、左大腿部後面中程に再び出現し痛みを伴った。そこで、1月14日に同市前原の石井皮膚科クリニックを受診した。同部から白色紐状で、長さ51mmの虫体が摘出された。虫体は10%ホルマリン液で固定された(図2)。臨床検査成績で特に異常は認められず、末梢血の好酸球は3%であった。なお、感染源と思われるものの摂取については不明である。

虫体の観察

カルミン染色による圧平標本では、体表に横皺は認めるが体節はみられなかった(図3)。虫体の病理組織標本(HE染色)では、角皮層に筋層および網目状の柔組織構造がみられた。また、屈光性の球形ないし楕円形の石灰小体が観察された(図4)。以上のことから、これらの虫体はマンソン裂頭条虫のプレロセルコイドであると思われる。

ウシガエルにおけるプレロセルコイドの調査

1997年4月15日、5月22日および29日に、福岡県筑後市の業者から食用蛙(ウシガエル)を入手した。各10匹、合計30匹の筋肉および内臓について、マンソン裂頭条虫プレロセルコイドの調査を実施したがすべて陰性であった。

考 察

マンソン幼条虫症の推定感染源は、ヘビ、カエル、ニワトリ、イノシシなどの生食である²⁾。この他に民間療法としてのカエル肉片の外用使用や、プロセルコイドを有するケンミジンコを水と一緒に飲みこんだ場合などもある¹⁾。本報の2例とも感染源と思われるものの摂取は不明であるが、本人は気がつかずに摂取したのかも知れないし、また谷川の水を飲んでの感染によるのかもしれない。

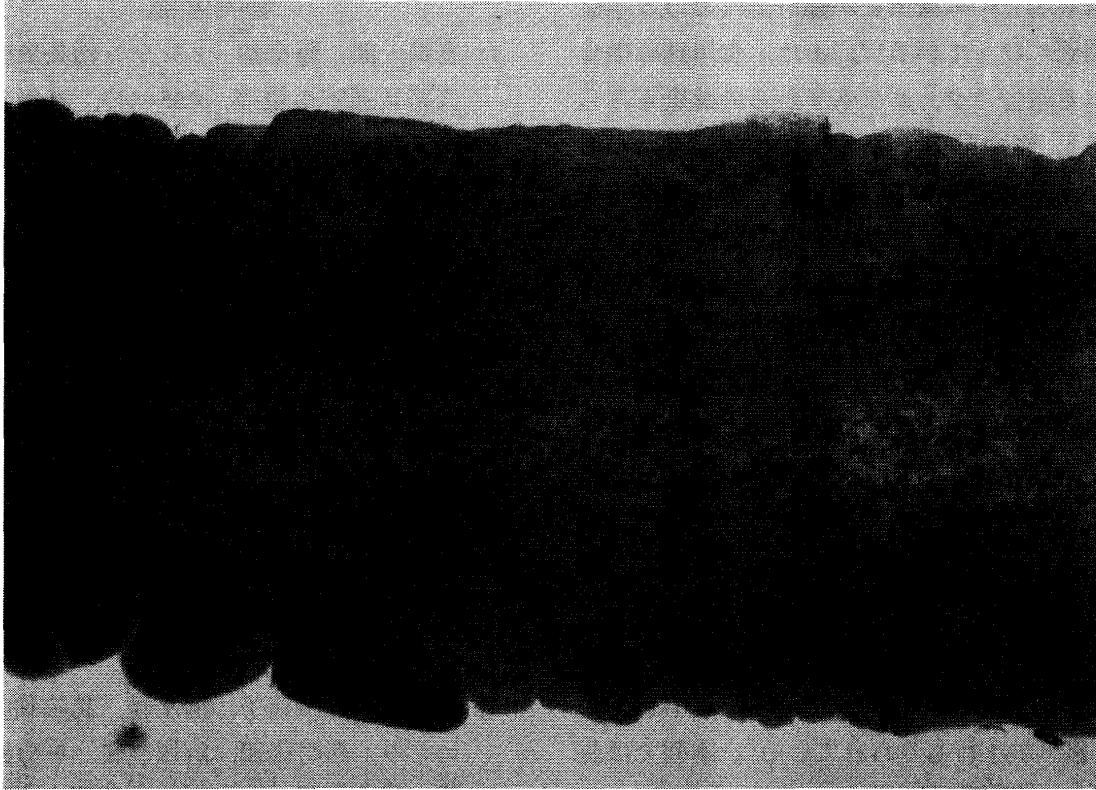


図3 プレロセルコイドの圧平染色標本(10倍)

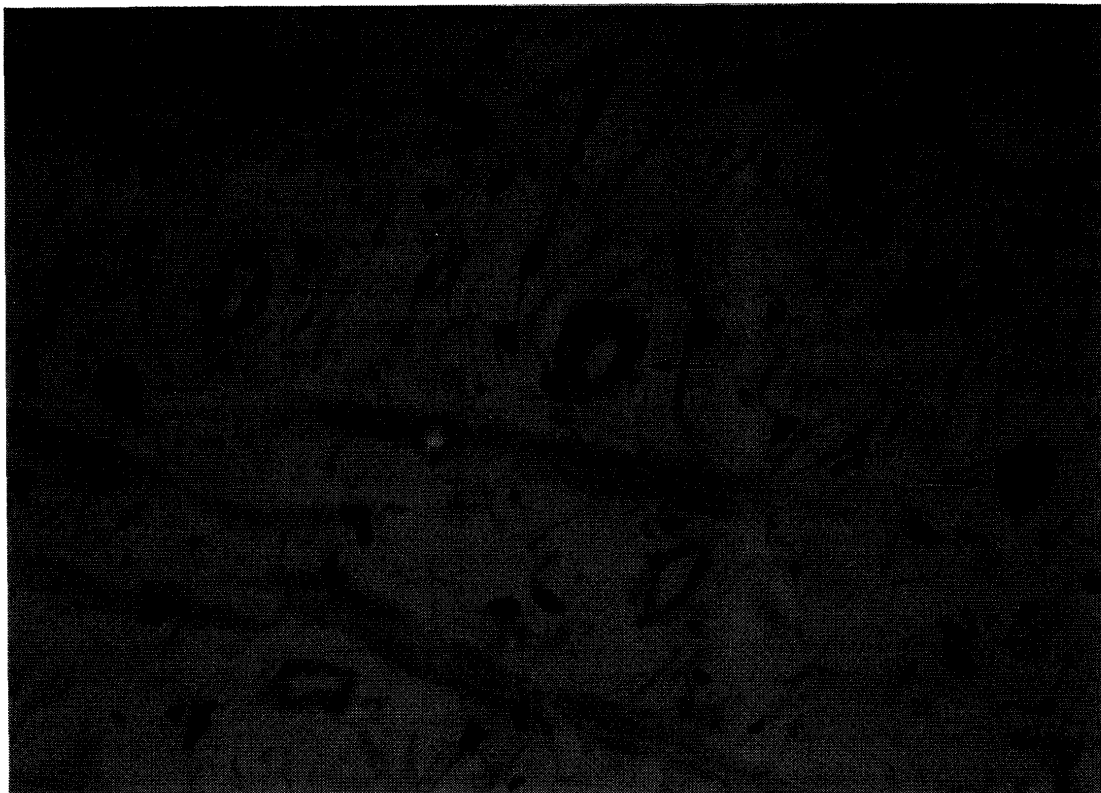


図4 プレロセルコイドの病理組織標本
(200倍, 矢印は石灰小体)

ヘビ料理店での刺身摂食が都市部における本症発生の原因になっている^{5,6)}。また、食用蛙の生食とみられる報告^{7,8)}や、ニワトリからの感染もみられている⁹⁾。熊本県下で採集されたウシガエルの調査では、354匹中164匹(46.3%)にプレロセルコイドを認めている¹⁰⁾。著者らは福岡県内で入手した食用蛙(ウシガエル)30匹について検査したが、プレロセルコイドは検出できなかった。最近、日本海裂頭条虫症(1, 514例)、マンソン弧虫症(469例)、大複殖門裂頭条虫症(178例)など裂頭条虫症の増加が指摘されており、流通機構の発達やグルメなどの時代背景が考えられている²⁾。そのため、感染源と思われるものの生食には十分な注意が必要である。

マンソン幼条虫症の発生部位は腹部20%、胸部14%、乳房13%、大腿部13%で、大脳、心外膜、ペニス、子宮への移行もみられている²⁾。本報では前報と同様に大腿部に見出された。

まとめ

福岡県内の31歳の女性の右大腿部および60歳の男性の左大腿部から摘出された虫体は、その形態的特徴からマンソン裂頭条虫のプレロセルコイドと思われた。

稿を終えるに当たり、寄生蠕虫血清検査を実施して下さった杏林大学医学部熱帯病学・寄生虫学教室教授辻守康先生に深謝申し上げます。また、本文の要旨は第62回日本皮膚科学会佐賀地方会および第32回九州臨床検査学会で発表した。

参考文献

- 1) 宮崎一郎, 藤幸治: マンソン幼条虫症. 図説人畜共通寄生虫症, 435~443, 九州大学出版会, 1988.
- 2) 山根洋右: 増加する人体裂頭条虫症—国際協力によるモニタリング体制の確立に向けて. 医学の歩み 171: 254~255, 1994.
- 3) 宮原道明, 清水万喜生: 幼裂頭条虫症の1例. 臨床検査 30: 1573~1574, 1986.
- 4) 宮原道明, 増田正孝, 林孝次郎: 福岡県で見出されたマンソン幼条虫症. 臨牀と研究 67: 3731~3732, 1990.
- 5) 伊藤洋一: 北里大学で経験した寄生虫症の症例Ⅱ吸虫症, 条虫症, 節足動物刺咬症. 北里医学 22: 1~8, 1991.
- 6) 山浦常, 磯田典子, 清水勝, 島田雅彦, 内山めぐみ, 西野隆義, 飯塚文瑛, 林直諒, 影井昇, 荒木国興: シマヘビ生食後成虫感染を見たマンソン裂頭条虫症の2例. 寄生虫誌 45: 446~447, 1996.
- 7) 藤原千冬, 山口恵三, 大友弘士, 荒木国興: マンソン孤虫症—うち一例は心嚢炎併発—. 日本医事新報 No.2847: 27~32, 1978.
- 8) 浦野聖子, 菅谷恵子, 夏目典子, 岩月啓氏, 田上八朗, 山田瑞穂, 記野秀人, 石井明, 森岡洋子: マンソン孤虫症—免疫学的手法を用いて診断した1例. 臨皮 37: 869~873, 1983.
- 9) 高尾善則: 第32回九州臨床検査学会での追加発言. 1997.
- 10) 磯部親則: 熊本県産のウシガエル(俗名, 食用蛙)に寄生するマンソン亜裂頭条虫に関する研究. 銀杏学園紀要 No.16: 11~30, 1992.